

中国の古典文学

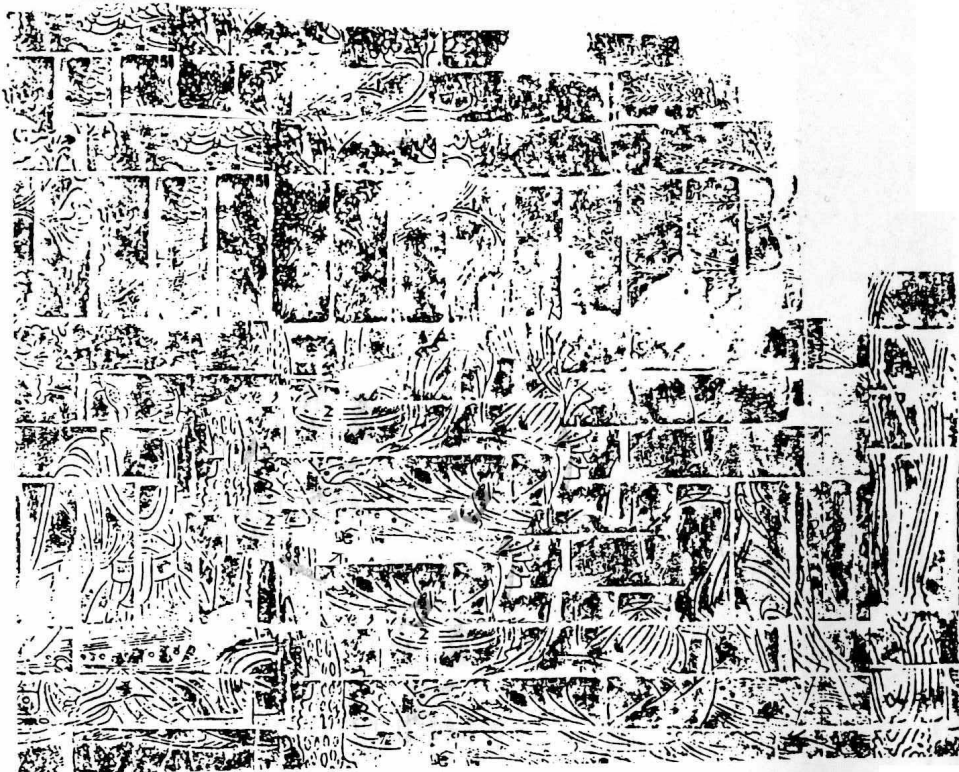
作品選読

伊藤漱平編

中国の古典文学

作品選読

伊藤漱平 編



東京大学出版会

中国の古典文学—作品選読—

1981年4月1日 初 版

[検印廃止]

編 者 ^{いとうそうへい}伊藤漱平©

発行所 財団法人 東京大学出版会

代 表 者 江村 稔

113 東京都文京区本郷 7-3-1 東大構内

電話 (811) 8814・振替東京 6-59964

製 版 三和印刷株式会社

印刷所 三栄印刷株式会社

製本所 新栄社製本所

3098-80464-5149

序

先年、六年ほど前になるが、前野直彬教授の編まれた『中国文学史』が東京大学出版会から刊行を見た直後、文学史入門の授業にこれをテキストとして使用してみたことがある。分担執筆者にも人を得た清新な好著であり、殊に時代ごとに掲げられた概観には、編者の文学史家としての史眼のきらめきが随処にうかがわれ、しばしば敬服の念を覚えずにはいられなかったのであるが、叙述がすこしく詳密に過ぎて、つまり当方の「出る幕」がなくなるような気もして、以後は参考書に指定するを習いとしている。テキストとして用いるにせよ、参考書として挙げるに止めるにせよ、どのみちわが講義の足しにするのであるから、その限りでは格別問題も感じなかった。するうちいつのことであったか、専門外の人と四方山話をしていて、その人は中国文学のファンを以て自任していたが、あの文学史には読本が欲しいですね、という注文を聞かされた。言われてみると、自分もテキストとして使用したときは、毎回作品例の教材を用意したし、なるほど、それももつともだ、という気になった。吉川幸次郎氏のはこれほど詳しくないけれど、原文は随分引かれていますね、ともその人は付け加えて言った。引合いに出された吉川博士の文学史は、大学の講義ノートを起したものとラジオの講座を活字にしたものと繁・簡の二種類あるが、確かにそう言えよう。

それが四年ほど前に、たまたま東京大学に転任してきて、先輩に当たる前野教授と同僚となり、その教授が遠からず還暦に値われ、大学の定年申し合せによる退官、中国風に言うところの「退休」の日を迎えられるというので、それを記念した書物を、教え子、これも中国風に言えば「受業生」の手でこしらえようという話が持ち上って、曲折を経たのち、話がいつかくだんの「読本」と結びついた。してみれば、こうした潜在的な読書家の要望がこの本を喚び出した

と言つて言えぬこともない。ちなみに本書の副題とした「作品選読」というのは、わが国の読書人にとっては、或いは目新しい、馴染みのないことばかも知れないが、「選読」とは読んで字のごとし、精選したテキストについてこれを講読するというほどの意味であり、中国や香港などで刊行された本の題名にも時に見かける。

さきに触れた前野教授編『中国文学史』は、門下のほとんど総力を結集して成ったものであると言つてよく、こんどこの書物の執筆者の主力となつたのも、やはりその人々である。それにその後の新進が加わつて、めいめい得手とするジャンルの作品を中国古典文学の広大な世界から採びとり、めいめいの流儀で講釈を繰り展げて成つたのが本書である。いわゆる名作が網羅的に収められているわけではなく、むしろそれから外れた異色作も少しとしない。一見それらを無造作に寄せ集めたようにも映らうが、数年に及んだ編集の過程を振り返つてみると、難産を極めたの感が深い。どの篇の筆者も、かつて前野教授によつて中国古典文学の世界を開眼され、読書の種子を播かれた学徒ばかりであり、学恩を思いこれを徳とするがゆえに、書きあぐねつつもようやく脱稿に至つた者また二、三に止まらない。その大切な読書の種子を未知の読者に頒とうとする執筆者すべての熱意がもしなかったとしたならば、恐らく本書は流産に終り、陽の目を見なかったことであろう。それにつけても感謝に堪えないのは、近來御健康のすぐれぬ前野教授御自身が、私共の請いを容れて詩・小説の二ジャンルに互る「選読」を實踐してくださつたことで、その聞書を付載し本書を飾らせていただいた。読者と共にこれ喜びたい。いま書成らんとするに当たり、縁起の一端と併せそれらのことどもを書き留めて、序に代えることとする。

一九八一年早春

伊藤 漱平

東京大学文学部中国文学研究室にて

中国の古典文学

— 作品選読 —

目次

序

詩・詞・文

阮籍の詠懷詩 空間と時間

歸去來の辞 隠者のうた

孫盛伝(晋書) ある六朝人の軌跡

元稹「四皓廟」 中唐詩の批判精神

柳宗元「南澗中に題す」 一つの、詩と政治

李商隱「詠史」 歴史と現実の交差

周邦彦「六醜」詞 詩余の達成しえたもの

楊万里「道傍店」その他 旅のなかの日常

滄浪詩話 抒情の復権

李卓吾先生遺言 死のあとさき

朱彝尊「高念祖に与えて詩を論するの書」 反政治と非政治の間

四庫全書総目提要 文献学的調査の原点

黄遵憲「日本国志の書成りて感を誌す」 その史と詩

伊藤漱平

成瀬哲生 三

石川忠久 六

松岡栄志 三

市川桃子 五

中島敏夫 三

斎藤 茂 七

野口一雄 九

山之内正彦 一五

横山伊勢雄 二〇

木山英雄 二四

伊藤虎丸 二七

和泉 新一三

佐藤 保 一六

小説・戯曲

眉間尺故事 中国古代の民間伝承

枕中記 真と仮の間

鶯鶯伝 中国恋愛小説の原型

「謝小娥伝」その他 中国小説と中国のことは・文体

鬼国統記（夷堅志） 史家と奇見異聞

元雜劇のせりふ その自称のことば

荆釵記 貞女の怨み

水滸伝 潘金蓮の人物形象

玉堂春（警世通言） 「有志婦人、勝如丈夫」

聊斎志異 人間の女と異類の女

紅樓夢 情から不合理へ

中国の詩と小説を読む 前野直彬教授に聴く

跋

執筆者一覧

高橋 稔 二九

竹田 晃 三〇

西岡晴彦 三一

尾上兼英 三二

大塚秀高 三三

伝田 章 三四

田仲一成 三五

高島俊男 三六

今西凱夫 三七

戸倉英美 三八

小山澄夫 三九

三〇

丸山 昇 三一

三二

器也遭時之非是以詘獨其始之不幸非遭高
光而以為幸也漢晉之末公侯卿相劫戮困餓
伏牆壁間以死無作焉彼固劫戮困餓器也遭
時之非是以出獨其始之幸非遭卓曜而後為
禍也彼困於昏亂伏志氣屈身體以下奴虜平
難澤物之德不施于人一得適其僊其進晚爾
而人猶幸之彼伸於昏亂抗志氣肆身體以傲
豪傑殘民興亂之技行於天下一得適其僊其
死後爾而人猶禍之悲夫余是以咸宜之

外集

吾子

曰吾子來也以有餘而欲及人乎曰然若用子
而能使竭忠孝乎曰否夫無忠而忠見無孝而
孝聞曷若使不見而忠無聞而孝肅然已出熙
然已及夫已也渾然矣乎

河間傳

河間淫婦人也不欲言其姓故以邑稱始婦人
居戚里有賢操自未嫁固已惡群戚之亂无羞
與為類獨深居為剪製縷結既嫁不及其舅獨

詩·詞·文

阮籍の詠懷詩

空間と時間

成瀬哲生

夜中不能寐	夜中寐ぬる能はず
起坐彈鳴琴	起坐して鳴琴を弾ず
薄帷鑒明月	薄帷明月鑑り
清風吹我襟	清風我が襟を吹く
孤鴻號外野	孤鴻外野に号び
翔鳥鳴北林	翔鳥北林に鳴く
徘徊將何見	徘徊して將た何をか見ん
憂思獨傷心	憂思して独り心を傷ましむ

阮籍(三〇二云々)、字は、嗣宗。三国末期の、魏の人、竹林の七賢の領袖として知られている。老莊思想をバックボーンに、形骸化した「世俗」の規範を拒否し、自律した生を求めた。

阮籍の思想を、散文によって論理的に表現した著作としては、「達莊論」と「大人先生伝」があり、すべての価値を相対化する万物斉同の哲学が語られている。万物斉同の哲学は、いうまでもなく、莊子に発し、老莊思想の重要な哲学的認識であるが、この二著について、吉川幸次郎博士は「この種の哲学としてもおそらくもっとも強烈な言葉が

ある。」「阮籍の詠懷詩について」とされている。

詠懷詩は、八十余首作られたといわれ、それに相当する数の作品が伝えられている。詠懷とは、心の底の感慨を歌うことである。自己の内面世界へ沈潜する思索性と孤独感が、全体をつらぬいている。そこには、論理として語りえなかった、阮籍の姿が現われている。

右の詩は、詠懷詩の篇次の最初に位置されている。古来、評価が高い。

「寐ぬる能はず」は、眠ることのできない自己の存在を、何とも知れぬ相手に向かってうったえかけている。少くとも身体が存在感をもてあます気配がある。鳴琴をかなでるのは、そのような心と身体の不調和を直接のきっかけとする行動である。

「不能寐」は、後漢から魏、つまり五言詩の発生から、五言詩が知識人の文学形式になるまでの用例を見るかぎり、ひとりねの女のことばとして、多く出てくる。また、旅先にある男のことばとして出てくる。旅先にある男のことばの場合、ひとりねであることは同じなのだが、必ずしも女を対象として発せられているわけではない。むしろ旅先にあって、故郷を思う孤独を背景とする。しかし故郷を思う孤独のなにがしかは、女と別離していることであろう。そして用例は、この二つの場合に限定されている。このことから考えると、「不能寐」とは、もともと男女の関係を連想の周辺にもち、相手に自己の身体が存在をうったえかけることばであったといえよう。

しかし、阮籍の「不能寐」は、もはや具体的対象をもっているわけではない。ただ自己の存在を、説明抜きに、もてあます身体として、何ものかにうったえるだけである。

琴は、当時の知識人の教養である。鳴の字がついているのは、何か特別製の琴であることを示すのではなく、琴の鳴るという属性を形容に用いたもの。もちろん聴覚的效果が、そこからより出てくる。

琴が心の不均衡を解消し、心身を平常にもどしてくれると考えられていたことは、たとえば、次のような『礼記』

檀弓篇の話などからもうかがわれる。

顔回の喪に、祥肉を饋る。孔子出て之を受け、入りて琴を弾じて后之を食う。

顔回は、孔子最愛の弟子。夭死した。祥肉は、忌みあけに供えた肉。鄭玄の注に、「琴を弾じて以て哀しみを散ず」とある。これを異様であるとか、孔子の哀しみが、その程度であつたのだとすることはできない。琴には、哀しみを散ずる霊力があると信じられていて、事実その結果をもたらすのである。おそらく、古代の心性にとって、琴に限らず、楽器は、単に楽器ではない。何らかの霊的能力を秘めたものであると考えられていた。そのような心性の上に、この話はつくられているはずである。

もちろん、阮籍には失われた心性であり、琴は、阮籍の哀しみをなぐさめはしても、もはや霊的であるがゆえの絶對的效果をもたらしことはない。

「夜中寐ぬる能はず／起坐して鳴琴を彈ず」という阮籍の姿に、共同体の中に埋もれていた人間が、個人として析出されてくる過程の哀しみまで見ることは、あるいは、過剰の解釈であるのかも知れないが、少くとも個人として、他者と切り離されていく人間の姿があることは確かであろう。

薄いとぼりが、月の光にかがやき、清らかな風が、えりもとに感じられる。「薄帷明月鑑り／清風我が襟を吹く」の句は、阮籍の視界の広がりであり、琴をかなでることによってもなぐさめきれなかった心に映じる、自然の美である。吉川博士は、「明月と清風とは、実際の叙景であると共に、象徴としても読まれるのであって、寂寥は明月とともに彼の周囲にたちこめ、憂愁は清風とともに彼をゆさぶっていると、感ずることが可能である。」(前掲文)とされる。視界の広がり映ずる自然の美も、哀しみに彩られてしまう、そのような深さの孤独が、阮籍の孤独である。ひとりねの女も、異郷にあるひとりねの男も、孤独な心を、自然の風光に投影するであろう。しかし、それはいつかは、哀しみをぬぐいさって見るのできるものなのである。

たちまちまがましい風景が、阮籍の脳裏に幻想される。「孤鴻外野に号び、翔鳥北林に鳴く」夜の空間に響く孤鴻と翔鳥の鳴き声。孤鴻は、群れを離れたおひとり。翔鳥は、天かける鳥。『文選』李善注本は、朔鳥に作る。それならば、北方から飛来する雁。夜は、聴覚が、視覚の上位にある。聴覚が、視覚の範囲を超えた、外野の広がりとは北林のしげみを幻想させるのだ。脳裏の幻想には、もはや、明るく月光も、清らかな風のそよぎも、失われている。

聴覚と聴覚の対句は、六朝詩の中に決して珍しくはない。若干の例をあげると、

猛虎憑林嘯 猛虎林に憑りて嘯き

玄猿臨岸嘆 玄猿岸に臨みて嘆く

咆虎響窮山 咆ゆる虎窮山に響き

鳴鶴聒空林 鳴く鶴空林に聒し

陸機「苦寒行」

張協「雜詩」

聴覚的效果は断句として見るとさほどかわりはないが、陽光の下空間であることによって、聴覚のみで形象化される緊張感は、和らいでおり、絵画的な印象を受ける。

また、夜の空間であっても、その空間が、日常性の中の、狭い範囲の広がりにとどまる場合、やはりイメージネーションのさいの緊張感は、あまり生じないようである。

蟬鳴高樹間 蟬高樹の間に鳴き

野鳥號東箱 野鳥東の箱に号ぶ

肅肅莎雞羽 肅肅たり莎雞の羽

傅玄「雜詩」

烈烈寒蟄啼

烈烈たり寒蟄ひんじの啼な

謝惠連「擣衣」

また、夜であり、かつ空間的には広大であっても、それが視認されうる広がりである場合、あくまで、それは、叙景であり、聴覚的效果は視覚の下位に位置する。

哀鴻鳴沙渚

哀鴻沙の渚に泣き

悲猿響山椒

悲猿山の椒いたさに響く

謝惠連「湖に泛びて帰りにて樓中より出でて月を翫ず」

「孤鴻外野に号び、翔鳥北林に鳴く」の句の緊張感、聴覚によって、視覚的イメージが、夜の広い空間として引き出されるところに、生じていると思われる。

ちなみに、この句は、古くからの解釈として、魏から晋しんへの権力の移動が生んだ悲劇を比喻したものだといえる。すなわち、孤鴻は、犠牲となった魏室の天子、翔鳥は、篡奪者の司馬氏であると。北林を、御苑の北部の後宮近くの林とする説に従えば、司馬氏の専横が、魏室の私的領域にまで及んでいることになる。

北林の用例は、『詩經』秦風の「晨風」にはじまるが、毛伝は、林の名とする。また『春秋左氏伝』宣公元年では、鄭ていの地、現在の河南省鄭県の東南の地名として出てくる。丁福保の『全漢三國南北朝詩』で用例の分布を見ると、漢魏晋の詩に、十三例で多くはないが、少くとも集中している。梁りやうの江淹に二例見られるが、「魏文帝曹丕遊宴」「效阮公〔阮籍〕詩」と題するように、魏詩に関連している。唯一例外といえるのは、梁の李鏡遠の「詠日」のみである。単に北の林であれば、数量的にはるかに多い宋齊梁陳の詩に、もっと用例があつてよさそうなのである。事実唐詩では、北の林の意味での用例が多くある。かといって、御苑の北部の後宮近くの林とし、君の側の意に限定するには、たとえば阮籍のこの詩はそうのように解しうるが、必ずしも、用例の集中まで説明するものではない。おそらく何か特

定の詩的イメージと、その詩的イメージが成り立つ根拠があったと思われるが、確認できない。

「徘徊して将た何を見ん／憂思して独り心を傷ましむ」阮籍は、外を徘徊する。おそらく庭であろうが、阮籍をとりかこむ空間は、高さにおいても、広がりにおいても、無限である。何を見んというとき、無限の空間の中で、始めて意味をもつ。阮籍の孤独が、この地上的世界では、絶対の孤独であるからこそ、何ものも見るべきものとして現在しないのだ。自己の孤独を、何ものかにかうったえようとした孤独は、自らの心の哀しみを、よりいっそう傷ませる孤独として、かえって深まっていく。

阮籍の詠懐詩には、この詩に限らず、内から外へと空間を拡大し、拡大した空間の中に孤絶する自己をイメージする傾向があるといえる。それは、孤独が孤独を発見していく、阮籍の現実に対する深い絶望の形象化ともいえる。次の詩は、阮籍の孤独が、空間的孤絶としてイメージされたもつともよい例であろう。

獨坐空堂上 独り空堂の上に坐す

誰可與歡者 誰か^{とも}与に^{よろこ}ぶべき者ぞ

出門臨永路 門を出でて永路に臨む

不見行車馬 行く車馬を見ず

登高望九州 高きに登りて九州を望めば

悠悠分曠野 悠悠として曠野分かる

孤鳥西北飛 孤鳥西北に飛び

離獸東南下 離獸東南に下る

日暮思親友 日暮親友を思ひ

晤言用自寫 晤言^{ごげん}して用て自ら^{のぞ}写く

九州は、世界。晤言は、吉川博士によれば、独語の義。

空堂、永路、九州と拡大されていく空間の中に、他者は、いっさい捨象されてしまっている。「日暮親友を思ひ／晤言して用て自ら写く」の親友とは、九州という絶対的に拡大された空間が「悠悠として曠野分かる」状態として阮籍の視界に広がっている以上、もはや現実にはあることのできない親友であるとせねばならない。少くとも阮籍にとって実在とはいえぬからこそ、九州は曠野なのである。

阮籍の酒と奇行の自己韜晦には、魏末の政治的混乱の中で、名家を出自とするがゆえに、生命の危険に身をさらさねばならなかった現実があった。しかし、この現実には、豪族が貴族化しつつあった歴史性の中で、考えなければならぬと思われる。危険で汚濁にみちた現実と一般化してしまうとき、阮籍の絶望的孤独は、ある意味で、矮小化されてしまうであろう。詠懷詩の中には、実在性をもった他者が登場することがない。これは、詠懷詩という、自己の内面世界を歌うというスタイルのためもあるだろうが、より本質的には、阮籍の貴族性にあったと仮定される。貴族性が、阮籍の視野を限定し、阮籍にとって、他者とは、貴族社会の他者であり、現実の生活の広がり存在する他者は、はじめから実在していなかった。阮籍が嫌悪し、拒否した世俗とは、貴族社会という世俗であり、それに絶望したとき、孤独が孤独を発見していく孤独として、阮籍の空間的孤独絶のイメージが形象化されたはずである。そして阮籍が絶望していたのは、逆に、阮籍その人の貴族性が、阮籍の視野を貴族社会に限定していたからである。これは、決して阮籍をおとしめることにはならない。むしろ、歴史性の中で、最大限に誠実たりえた人のみがなしうることである。

阮籍が、人間の運命としての死を見つめつづけていたことは、詠懷詩をひもとけば、あまりにもよくわかる。しかし、生に死の相を認識する詩句は、阮籍にあっては、図式的であることを免れていないようである。いくつか例をあげると、